

実践報告

三重大学国際交流月間「セルビアを知ろう！」 の実施について

松 岡 知津子

How we organized the “Let's know Serbia!” activity of the Mie University International Month

MATSUOKA Chizuko

〈Abstract〉

One of the events of the International Month organized by Mie University, held in December 2012, was the activity “Let's know Serbia!”. Six Japanese students and a teacher, together with Serbian students formed Team “Let's learn about Serbia” and promoted the event among the participants of the “Foreign Students Support” course of Mie University. Power-point presentations, quiz contests and other activities about Serbia were held, during which over 60 participants increased their knowledge about Serbia. Moreover, traditional Serbian sweets and bread were served and were very much appreciated by the participants.

キーワード：国際交流月間 セルビア 留学生 交流 クイズ

1. はじめに

2012年度国際交流月間における「セルビアを知ろう！」は、2011年国際交流週間の「モルドバを知ろう！」に引き続き、筆者が企画・運営を担当したイベントのひとつである¹。2011年度の成果および課題を踏まえ、今年度、いかにしてイベントの実践に至ったのか、また、それは昨年度と比較してどのようであったかを以下報告する。

まず、この企画の実施には2つの目標があった。

一つ目は、三重大学生にあまり馴染みがないと考えられる国・地域からの留学生に自国を紹介してもらい、三重大学生がその国・地域についての知識を深めることであった。さまざまな情報があふれる現代、いくら馴染みのない国・地域とはいえ、かなりの情報は入手できるものである。しかしながら、留学生の口から自国・地域について直接語られることには大きな意義があると考えた。また、イベントに参加する三重大学生にも同じ大学で学ぶ留学生のことについて、少しでも身近なこととして関心を持ってもらえたらと思ったのである。

二つ目は、発表者の留学生と聴衆として参加する三重大学生との交流はもちろんのこと、その場にいる参加者同士の交流を通して国際交流を進める場を提供することであった。本企画の参加者は、昨年度も今年度も日本人学生のみならず多くの留学生の参加もあった。そのため、発表を担当する学生との交流以外にも国際交流は十分行えるのである。

以下では、まず次節で昨年度に実施した「モルドバを知ろう！」を簡単に振り返る。そして、その際の成果と課題について述べる。3 節では、それを踏まえて「セルビアを知ろう！」がいかに行われたのかを報告する。そして、4 節では、本イベントの振り返りを行う。

2. 2011 年度「モルドバを知ろう！」の実施

2.1. 「モルドバを知ろう！」の準備から実施まで

発表は、三重大学大学院工学研究科博士課程前期に在学するモルドバ共和国出身の学生が担当した。実行委員は、共通教育科目「留学生支援実践」の参加者全員が授業の一環としてかかわった。イベントまでの流れ、そしてイベント当日の流れは、概略以下のとおりである。

まず、企画・運営担当である筆者が、モルドバ共和国の学生と日本語及び英語で事前に打ち合わせを行い、どのような内容について発表するかを大まかに決めた。そして、教員が○×クイズ、モルドバ共和国に関する発表用のスライドおよびクイズの解答用紙等を作成した。これは、発表者である留学生の日本語能力と大学院在籍中であり研究活動に忙しいという事情を考慮してのことである。その後、「留学生支援実践」において発表者を紹介し、その受講生が「受付担当」「司会者」「会場」等の分担を行った。そして、それぞれの担当ごとに必要な項目を検討した。また、ポスターを作成して学内で配布するなどして参加者の呼びかけを行った。

当日は、留学生支援実践の受講生が中心となって会場設営が行われた。イベントに使用したものは、ノートパソコン、マイク、プロジェクター、スクリーン等の機器類の他、4～5 人ごとに座る机と椅子、受付用のデスク、クイズの景品、ネームカードやペン、付箋、模造紙である。また、和やかな雰囲気での交流ができるよう、飲み物やお菓子類も準備した。そのほか、モルドバの留学生の協力により、モルドバの写真や本、テーブルクロス等が展示された。

会場設営が終わり、参加者が着席したところで、司会者がモルドバの学生を紹介し、イベントが始まった。発表者が紹介された後、まず、モルドバに関する○×クイズが行われた。まず、「問題編」としてすべての問題について Power-point で提示し、参加者に配布

した用紙に記入してもらった。すべての参加者の解答が終わったところを確認して、次に「解答編」として、1問1問正解を確認していった。クイズが終わったところで、全問正解した参加者には小さな記念品が贈られた。その後、主に写真や音楽などを用いた紹介が行われた。モルドバの紹介が一通り済んだところで、発表者や発表内容に関する質問・コメントの時間を設けた。質問・コメントは、テーブルごとに配布されている付箋に質問やコメント等を書いてもらい、壁に準備した模造紙に各自貼り付けていてもらった。寄せられた質問・コメントは、実行委員会の学生によって分類され、類似したコメントや質問などがまとめて紹介された。発表者である学生は、日本語力が十分でないため、質問やコメントには通訳がつけられ、質問やコメントにフィードバックを与えていくこととなった。

イベントは盛況であり、予定時刻が過ぎても会場で参加者たちの交流が続いた。特に、発表中に紹介されたモルドバの音楽とダンスには多くの参加者が興味を持ち、終了後にみんなで輪になってダンスをするほどの盛況ぶりであった。参加者からも多くの肯定的なコメントが寄せられた。

2.2. 反省点および次年度に向けた課題

発表者の学生や参加学生からは概ね好評ではあったものの、次年度に向けての課題も残された。ここでは、「モルドバを知ろう！」実施における課題について述べていくことにする。

まず、発表を担当する留学生の負担についての配慮である。それは主に日本語力に対する配慮と、留学生の準備の負担である。発表を担当し留学生の日本語力は中級程度であり、必ずしも十分な日本語力を有しているとはいえなかった。そのため、事前に担当教員である筆者と日本語のチェックを行ったが、やはり本番になると緊張したり、とっさのことに対応できなかつたりしたこともあった。なんとか、本番中に自然な形でサポートすることはできないだろうかという課題が残された。また、発表を担当した学生の負担はかなり大きかったものと考えられる。この学生は大学院に在籍しており、日ごろの研究活動も忙しい。そのため、なんとかその負担を分散させることができないかと考えた。

次に、教員の役割についてである。「モルドバを知ろう！」では、発表の内容やクイズの作成において、教員が留学生と日本語および英語で相談して決定した。また、クイズの解凍用紙やスライドの一部も教員が補助した。そのほか、イベント当日は他の教員が通訳をした。これは、発表者の留学生の日本語力が十分でなく、会場からの質問やコメントにスムーズに答えられない可能性があったからである。しかしながら、本来の「国際交流週間」の趣旨を考えれば、教員と留学生が交流するのではなく、三重大学生との交流の機会

を増やすべきである。このようなイベントは、本番だけが交流の場では決してなく、準備段階も大切な交流の場であることは言うまでもない。このように、教員のイベントへのかかわり方については大きな課題が残されていたと言えよう。次年度に向けて、いかにして学生同士の交流の場を増やしつつ、留学生による発表内容のレベルを維持するかという点については、検討する必要がある。

3. 2012 年度「セルビアを知ろう！」の実施

3. 1. 「セルビアを知ろう！」の準備

「モルドバを知ろう！」の成果および課題を受けて、「セルビアを知ろう！」では、留学生支援実践の受講生に、早い段階から企画や運営に深く携わってもらうことにした²。イベント実施のおよそ 1 か月前に発表担当の留学生を授業に連れて行き、紹介した。そして、だいたいどのような発表を行うかについて受講生と留学生で考えてもらった。主な流れは、昨年度の「モルドバを知ろう！」を参考にすることとしたが、詳細については学生同士で考えてもらった。教員は報告や相談を受けるのみとし、話し合いには基本的にタッチしないこととした。そうして、6 名の日本人学生が役割を分担し、昨年同様司会、受付、会場係などを担当した。昨年度に比べると、イベントに直接かかわる学生の数は減ったことになるが、かかわり始めた時期も早く、また、それぞれの役割がはっきりしていたため、昨年比べて準備に手間取るといったこともなかった。

2011 度の発表者に比べると、2012 年度の発表者の日本語レベルが多少高く、通常のコミュニケーションには大きな問題は感じられなかった。しかしながら、自国の政治や地理、宗教などについて紹介するには、発表者の負担がかなり大きいと考えた。発表者の学生は博士課程に在籍しており、日ごろは研究に忙しい。そのため、限られた時間でできるだけわかりやすい発表が作れるように工夫する必要がある。そこで、昨年度の課題の 1 つでもあった教員による通訳の問題も含めて、以下のように行うこととした。すなわち、日本人学生の司会者が発表者の準備したスライドについてコメントを行っていきながら、内容について質問していくというものである。このようにすることで、まず発表者が話さなければならない日本語の量はずいぶん減る。また、こうすることで、時間的にもコントロールすることが可能になるだろう。つまり、日本人学生が時間を考えながら質問の内容を増減させることで、多少の時間の誤差を調整できるということである。こうすれば、日本人学生の負担は多少増えるが、留学生の負担は半減されることになる。

3.2. 「セルビアを知ろう！」の実施

当日は、4時半からの開始に向けて、2時半に発表者、司会者、受付係、教員が会場に集合した。そして、コンピュータや椅子、受付のデスクやセルビアのお菓子などの飾りつけを行った。発表者が本イベントのために自宅でセルビアの伝統的なお菓子やイースターエッグ、パンなどを準備してきてくれており、イベントに花を添えた。参加者からは、初めて見るセルビアのお菓子やイースターエッグに歓声が上がっていた。



写真1. 玉ねぎ染めのイースターエッグ

イベントの流れは、概略以下のとおりである。まず、司会者が、発表担当の留学生についての簡単な紹介を行った。その後、留学生が自己紹介をし、Power-pointによってセルビアに関する〇×クイズを始めた。昨年度同様、クイズの優秀成績者には記念品が準備されていたこともあり、また、日本人にはあまりなじみのない問題が数多く出題されたこともあり、会場は盛り上がりを見せた。

クイズは、まずすべての問題が紹介され、参加者たちは受付時に配布されたアンケート用紙兼クイズ解答用紙に解答を記していった。すべての問題が終わったところで、1問目から全体で正解を確認していった。そして、正解者の上位から記念品を贈った。

次に、Power-pointによる国紹介を行った。直前にセルビアに関するクイズを行っており、正解を確認したうえで行っているため、参加者にはある程度セルビアについての知識が入っている状態といえる。そこへ、前節で述べたとおり、スライドを見ながら司会者の学生が発表者にコメントや質問をしながら進めていくという形式で行った。そうすることにより、留学生の日本語の負担も減り、また聴衆も一



写真2. 〇×クイズに挑戦する参加者

方的にセルビアについての講義を受けるのに比べて、理解しやすかったのではないと思われる。昨年度の発表者とはももとの日本語レベルが異なっているため、昨年度と今年度を単純に比較することはできないが、イベント後に回収したアンケートにも司会者と発表者のやりとりの素晴らしさについて触れているコメントが複数見られた。また、発表は、写真や音楽だけでなく、写真1のような実物も用いて行われた。セルビアでは、イースター

エッグをそれぞれが手に持ってぶつけ合い、最後まで卵の殻が割れなかった人が誰かを争うしきたりがあるとのことであるが、当日も、発表者と司会者で卵を実際にぶつけるパフォーマンスをして見せ、イベントを盛り上げてくれた。

このようにして、セルビアについての〇×クイズや写真、絵、音楽、そして実物といった多様な方法で紹介を行った後、会場からの質問やコメントを受け付けた。会場からは、途絶えることなく、さまざまな質問・コメントが寄せられ、参加者のセルビアに対する関心の高さがうかがえた。質問・コメントが終わったところで、発表者が準備してくれたセルビアのお菓子やパンなどが参加者にふるまわれた。見た目が美しいだけでなく、味もおいしいセルビアのお菓子は参加者に大好評であり、その後、イベント終了まで交流が続けられた。イベント終了後に回収したアンケートからも、上記で記した以外に「セルビアに行ってみたくなった」というセルビア王国そのものへの関心を示したコメントや、「お菓子がおいしかった」、「お菓子を作るのが上手だった」、「発表が素晴らしかった」、「とても分かりやすい発表でよかった」といった発表者への賛辞、「とても楽しかった」という、企画自体への感想など肯定的なコメントが数多く寄せられた。また、発表者の留学生からも、自国について紹介できる機会が得られたことをうれしく思ったとのコメントが得られた。

4. まとめと今後の展望

冒頭で述べたように、本企画には2つの目標があった。

1. 三重大学生にあまり馴染みがないと考えられる国・地域からの留学生に自国を紹介してもらい、三重大学生がその国・地域についての知識を深めること。
2. 発表者の留学生と聴衆として参加する三重大学生との交流はもちろんのこと、その場にいる参加者同士の交流を通して国際交流を進める場を提供すること。

これらの点について振り返ってみると、どちらも達成できたと言ってよいだろう。特に2点目については、イベント当日だけでなく準備段階からすでに6名の日本人学生と発表担当の学生の間で活発な交流が行われており、お互いの中に信頼関係が築かれた状態で本番を迎えることができたという点が高く評価できよう。また、この点に関しては、前年度の課題の1つでもあった教員のかかわり方の問題をも解決したと言えよう。

今後も、留学生と三重大学生、ひいては地域住民との交流を進めていくべく、さまざまな活動が期待される中、本企画もよりよい形を目指して作り上げていきたい。

注

- 1 筆者が本企画を担当する前から国際交流週間における「～を知ろう！」シリーズは行われてきていた。その際には、「三重大学生になじみの少ない国・地域からの留学生が自国・地域について紹介する」というコンセプトは変わらなかったが、その実施方法などは全く異なるものであった。また、本企画は、「留学生カフェ」という留学生と三重大学生のための交流イベントの一環としても行われた。「留学生カフェ」は、月に一度程度行われており、12月は「セルビアを知ろう！」をカフェとした。
- 2 2012年度留学生支援実践の受講生は20名弱いるが、全員が「セルビアを知ろう！」にかかわったわけではなく、その内6名だけが本企画にかかわった。その他の受講生は、国際交流月間における他のイベントにかかわったり、次年度に実施する留学生オリエンテーションのためのパンフレット作りにかかわったりするなどした。ただし、「セルビアを知ろう！」当日は、「セルビアを知ろう！」班以外の受講生も観客としてイベントに参加した。